P.150

第十六号

No. 1

三吉のボール箱

田中宇一郎

三吉は山中のさびしい町に住んでゐましたが、よく、お母さんに小使銭をねだつては駄菓子屋へいろいろな菓子を買ひに出かけました。多い時は四五度も出かけるのでした。

「三吉、お前は困つた子だね。そんなにつまらない物を度々買つて来てさ。お母さんだつて、そんなにお金があるぢやなし、無駄使ひをしては困りますよ。」とお母さんは三吉をたしなめました。

三吉の家は貧しいお百姓でした。お父さんは朝早くから晩方まで一日中畑に出て一所懸命働き、お母さんもそれを度々手傳つたり、家の中でいろいろ忙（いそが）しく働いたりしました。

三吉はいくらしかられても小使銭をねだつては駄菓子屋へ走つて行くことをやめません。

KS原稿用紙A型
10×20